平成29年8月18日（金）
奈良新聞

飲水思源 4

自動車販売のリーダー □菊池武三郎伝

菊池武三郎が奈良で商売を始めたころ、大阪電気軌道（大軌電車）が大阪―奈良間を走っていた。現在の近畿日本鉄道の前身である。

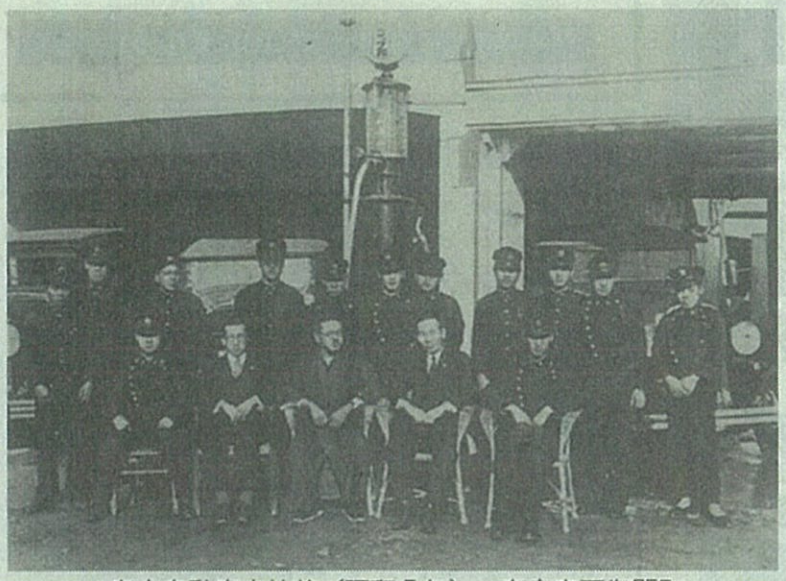
この大軌電車で奈良に来る観光客は、自動車3台ほどで営業する大軌構内タクシーを利用することが多かった。武三郎はこのタクシーに目をつけ、権利を手にして念願の自動車運輸業に転じたいと思っていた。

大軌構内タクシーは、後に奈良市長となる森田宇三郎が名義人だった。武三郎が熱心に頼むと、森田は資金がなかった武三郎に権利を譲ってくれた。昭和4年、武三郎は専務取締役となり、大軌構内自動車を設立した。

奈良の旅客輸送を総合的に手がけたいと考えていた武三郎は、奈良―木津間の小型バスの権利も買収。木津自動車も設立し、代表取締役となった。さらに中心事業と考えていた、奈良観光の拠点の東大寺と春日大社、法隆寺を結ぶバス会社、奈良自動車を設立。取締役支配人となった。

念願の自動車事業へ

タクシーやバス好調



奈良自動車本社前（昭和5年）＝奈良市西御門町

自動車事業に着手した武三郎は、これらの会社を一本化。奈良自動車に吸収する。さらに次々に個人経営の小路線を買収。4年末に同社は、大軌奈良駅―春日大社▽西御門―法隆寺―法隆寺駅▽西御門―木津▽法隆寺―王寺―下田▽法隆寺―田原本―三輪▽京終―田原本―の6路線に車を走らせるようになった。

当時使用していた観光用バスは、6人乗りの「1930年式フォードコマーシャルバス」で、車体を銀色に塗装した。既成路線の「青バス」に対して「銀バス」と呼ばれた。

武三郎は同社の経営で、さまざまなアイデアを発案。タクシーの運転手の制服はモダンなダブルボタンにし、自動車業が時代の先端の職業であるとのプライドを持たせた。また奈良―木津間を黒字路線とするために、木津川に水泳場を開設。構内タクシーでは、市内の均一料金制も採り入れた。

武三郎の優れた手腕で同社は業績を上げ、銀バスの名は奈良の名物となった。しかし、不本意ながら同社を手放さなければならなくなる日が、武三郎を待っていた。

＝つづく、毎週金曜日掲載＝